

ロジャー・ケースメント (1864-1916)

— 「早すぎた男」¹⁾ のアフリカ、南米、アイルランド

小村 志保

アイルランドの首都ダブリンにあるグラスネヴィン墓地には、市井の人々と共にアイルランドの歴史にその名を残した人々が眠っている。この墓地の学芸員はかつて「英雄」の条件を「外見が良く若いうちに悲劇的に死ぬこと」と私に語った²⁾。イギリスからの分離独立を目的とした1916年のイースター蜂起に始まり、1919年から1922年にかけて断続的に続いた対イギリス独立戦争、その結末としてのアイルランドの南北分轄と南部アイルランドの独立、そして南北分轄の是非をめぐる起こったアイルランド内戦の勃発から終息までの時期は、アイルランドの「革命期」と呼ばれる。数百年も続いたイギリスの支配³⁾から北部をイギリス領に残したままではあるもののついに独立を果たすに至ったこのわずか数年の間に、アイルランドでは多くの命が失われ多くの悲劇的な出来事が起きたが、それと引き換えに多くの「英雄」も生み出した。なかでもアイルランド現代史を代表する「英雄」の筆頭として挙げられるのはイースター蜂起の首謀者として処刑された16名であろう。彼らは1916年4月末のイースターの週に武装蜂起を起こしたものの、その戦闘をわずか6日間だけ継続させた後イギリス当局に逮捕された。この武装蜂起の直後には約3,500人の逮捕者を出したが、そのうち死刑判決を受けたうえで実際に処刑されたのは16名であった。

この16名のうちの15名は、公開の裁判を受ける機会を与えられることもなく、逮捕から数週の間アイルランド国内で銃殺刑に処せられた。しかし1名だけ全く異なる過程をたどることとなる。この1名とはロジャー・ケースメント (Roger Casement, 1864-1916) である。ケースメントだけは逮捕から身柄勾留の経緯が異なり、またロンドンで公開裁判を受けた末、同じ年の8月に絞首刑になった点でも他の首謀者たちとは異なっ

¹⁾ Mario Vargas Llosa on Casement, Interview with the BBC, 25 November 2013, <https://www.bbc.com/news/uk-northern-ireland-25017936>.

²⁾ 「男性であること」も条件に加えるべきだろう。

³⁾ イングランドによるアイルランドへの介入は12世紀末に始まるが、16世紀の宗教改革後、主にイングランドとスコットランドからプロテスタント教徒を入植させる政策を実施し、またカトリック教徒に対しては刑罰法を制定してその権利を制限することで、アイルランド国内に住むプロテスタント教徒が政治、経済、軍事などすべての分野を支配する「プロテスタント・アセンダンシー (Protestant Ascendancy)」と呼ばれる体制が整い、イギリスによるアイルランドの事実上の植民地化が進んだ。さらに1801年から1922年までの期間は「合同法 (the Act of Union)」によりアイルランドは正式に連合王国の一部として併合されていた。

ている。さらに言えばそもそもケースメントはイースター蜂起の戦闘そのものに参加していてもいなかった。それどころかこの武装蜂起を起こすこと自体に反対意見を持っており、事前からこの蜂起が成功しないであろうことも予見していたのだった。それでもなお自らの命を危険にさらしながらこの蜂起への準備に専心していたのだった。

ケースメントがイースター蜂起の他の首謀者たちと異なっているのはその最期だけではない。生い立ちや経歴もまったく異なっている。イースター蜂起とそれに続く独立戦争を経てアイルランド南部がアイルランド自由国として自治領となり、その後共和国として完全な独立国となるまでの過程で、指導的な役割を果たした人々は蜂起の首謀者たちを含めて「非常に保守的で、伝統的な家族観に基づく農村的なカトリック教主義」⁴⁾が特徴とされる。この特徴がアイルランド自由国と共和国の憲法にも反映されたことからわかるように、彼らのアイルランド社会への影響はその後長い期間続くこととなった。蜂起の首謀者として処刑された16名も全員カトリック教徒であったため、彼らは「カトリック国アイルランド」の「新しい英雄」となった。処刑後すぐに「彼らを記念するミサ」が執り行われ、「絵はがきやバッジ」も売り出されるなどして、彼らは政治的な意味でも宗教的な意味でもアイルランドという新たな国家を生み出すための文字通りの「殉教者」となったのであった⁵⁾。ところがケースメントはアングロ・アイリッシュ (Anglo-Irish) と呼ばれるアイルランドでは歴史的に支配層であり、その多くがイギリス本島に祖先を持つプロテスタント教徒の家に生まれ育っていた。さらにイギリス政府機関の職員として植民地局と外務省に勤務し、その時の人道的な活動によってイギリス王室からナイトの称号さえ受けとっている。

加えて逮捕から処刑まで数か月の時間があったため、外交官時代の人道的な活動の結果世界的に名声を得ていたケースメントのためにイギリスやアメリカなどで減刑を求める運動も起こるなどした。こうした動きを牽制するためか、逮捕から裁判で判決が出されるまでの期間に彼が同性愛者であるらしいことが暴露されるに至って、ケースメントの生涯とその死は、アイルランド現代史における他の「英雄」たちとは異なる意味を持つこととなった。先述したように非常に保守的でカトリック教会の力の強かったアイルランドでは「公に同性愛者としてのケースメントを受け入れることは問題外」であり、多くの血を流して独立を勝ち取った「新生アイルランドには性的逸脱を認める余地はなかった」⁶⁾のであった。

こうした経緯からケースメントは長い間アイルランド独立運動の「脇役」となってしまった⁷⁾。しかしその処刑から1世紀を経た今では、ケースメントの生涯が我々に問いか

⁴⁾ Brian Lewis, 'The Queer Life and Afterlife of Roger Casement', *Journal of the History of Sexuality*, Vol.14, No.4, (October, 2005), p.376.

⁵⁾ Richard English, *Armed Struggle: The History of the IRA*, (MacMillan, London, 2003), pp.5-6.

⁶⁾ Lewis, *op. cit.*, p.376.

⁷⁾ Roger McHugh, 'Casement and German help' in F. X. Martin, ed., *Leaders and Men of the Easter Rising: Dublin 1916*, (New York: Cornell University Press, 1967), p.187.

けている課題が極めて今日的な要素を持っていることに気付かされる。このことはケースメントが他のアイルランド現代史における「英雄」と際立って異なる点である。その「保守的なカトリック主義」故に他の「英雄」たちの及ぼした影響がアイルランド社会に限定される傾向にあるのに対し、ケースメントはより普遍的で今日的な性格を持っていると言えよう。本論ではケースメントの生涯を振り返るとともに、それが今も我々につきつけている課題を考えてみたい。

(1) アフリカ

ロジャー・ケースメントは1864年アイルランドの首都ダブリンで生まれた。イギリス軍人であった父親はプロテスタント教徒、母親はカトリック教徒であった。ケースメントは生涯自分がプロテスタント教徒だと思っており、教育もプロテスタントとして受けたが、実はケースメントが幼い頃母親が密かにカトリック教徒として洗礼を受けさせていた。このことをケースメントが知ったのは処刑の直前、カトリックに改宗する希望を刑務所付きの神父に相談した時だった⁸⁾。9歳頃に母親を亡くしたためそれ以降は父親の故郷である北部アントリム州で育ち、13歳の時には父親も亡くして父方の親族に養育された。地元の公立学校を15歳で卒業すると親族のいたイングランドのリバプールに渡り、船舶会社エルダー・デンプスター (Elder Dempster & Co.) に就職する。後年ケースメントは「親戚の誰一人にも一銭も借りず、親戚の誰一人私を助けようとした者はおらず・・・15歳半で世の中に出て、人生のすべてを自分で切り開いてきた」と語っている⁹⁾。ここで事務職として3年程働いた後、19歳の時この会社の所有する船のパーサーとなって初めてアフリカへ航海する。これが20年以上続くケースメントとアフリカとのかかわりの最初の機会となった。その後いくつかの団体に働いてアフリカ「開発」の調査や測量の仕事に就き、1892年にはイギリス植民地局の職員となってニジェール海岸保護領 (the Niger Coast Protectorate) で3年間勤務する。1895年からはイギリス外務省職員となり、1897年までポルトガル領東アフリカ (現モザンビーク)、1899年までは同じくポルトガル領西アフリカ (現アンゴラ) の領事となる。この年から1900年まではボーア戦争に協力するため現在の南アフリカにも滞在し、ここでの働きに対して女王から勲章を与えられた。1900年から1903年には当時のコンゴ自由国 (the Congo Free State) の領事となるのだが¹⁰⁾、ケースメントの人道主義者としての名声が高まるきっかけとなるのはこのコンゴ自由国での経験である。

⁸⁾ Angus Mitchell, *16 Lives: Roger Casement*, (Dublin: O'Brien Press, 2013), chapter 12; Dennis Gwynn, *The Life and Death of Roger Casement*, (Jonathan Cape, London, 1930), pp.307-9 などにアイルランド出身だった神父とのやり取りが詳しい。

⁹⁾ National Library of Ireland, 13073/46, quoted in Jeffrey Dudgeon, *Roger Casement: The Black Diaries with a Study of his Background, Sexuality and Irish Political Life*, (Belfast, Belfast Press, second edition, 2016, first published in 2002), p.76.

¹⁰⁾ Mitchell, *16 Lives*, chapter 2; Dudgeon, *op. cit.*, pp.73-4.

コンゴ自由国は1885年のベルリン会議での決定によりベルギー国王レオポルド2世 (King Leopold II, 1835-1909) の個人所有地となった地域である。この決定でコンゴ自由国は他のどの国家とも自由な貿易をすること (国名の「自由」はこの交易の自由の意味) と、国王が以前より表明していたコンゴ川流域の先住民族に対する「文明化」を実現することがこの地域を国王の個人所有地にする条件とされた。これにより国王は望んでいたコンゴ川河口近くの土地とマタディ (Matadi) 港を手に入れた。「ベルギー国民の多くは国王の外交政策にほとんど関心がなかった」ものの、国王の新しい植民地が「イギリス、フランス、ドイツ、スペインとイタリアを合わせた面積より広く、アフリカ大陸の13分の1を占め、ベルギーの大きさの76倍もあることに驚いた」。ベルギー国内では憲法によって国王の権限が定められているが、コンゴ自由国での国王レオポルドの権力には制限がなく、かつベルギー政府から独立したものであったため、ベルギー政府の閣僚でさえ「コンゴが新たな法律を発表し新たな国際協定に調印したと新聞を開いて初めて知り国民と同様に驚いた」のだった¹¹⁾。

ベルリン会議での決定にもかかわらず、現実にはコンゴ自由国では1890年代に入る頃には現地の住民を使用した過酷な強制労働が横行するようになっていた¹²⁾。象牙と天然ゴムの輸出がコンゴ自由国からの主な輸出品だったが、特に天然ゴムの需要の急速な拡大は、コンゴへの投資で莫大な借金を抱えていたレオポルド2世にとっては願ってもない出来事だった。1890年にダンロップ社がタイヤの製造を始めて自転車ブームが起きると世界中でゴムへの需要が高まった。さらにホース、チューブなどの道具や、電報や電話、電線用の部品としてもゴムは欠かせないものにもなっていた。この世界的なゴムブームの影響を最も受けたのはレオポルドのコンゴ自由国だった。国土のほぼ半分を天然のゴムの木がおおっていたからである。1890年と1904年を比較すると、ある会社のコンゴ自由国でのゴムに輸出による収入は96倍になった。この時コンゴ自由国はアフリカで最も収益の上がる植民地となったが、利益が上がるのには理由があった。天然ゴムが作られる植物には手入れも肥料も不要で、投資が必要となる高額な道具も必要なかったのだ。必要なのは労働力だけだった¹³⁾。

コンゴ自由国には、天然ゴムの採集と出荷を国王から認可を得た会社が行う地域と国王が直接管理する地域とがあった。どの地域でも利益を最大にするために、労働力として使用される現地の人々は過酷な経験をした。ゴムの採集は重労働だが、その対価として与えられたのは塩やナイフなどわずかなものだった。男性労働者たちは100フィート以上もある高い木に登ってツタに切り込みを入れゴム液を採取する。それを自らの皮

¹¹⁾ Adam Hochschild, *King Leopold's Ghost: A Story of Greed, Terror, and Heroism in Colonial Africa*, (London, Pan Books, 2006, first published in 1999), p87.

¹²⁾ Hunt Hawkins, 'Joseph Conrad, Roger Casement, and the Congo Reform Movement', *Journal of Modern Literature*, Vol.9, No.1 (1981-2), p.67; William Roger Louis, 'Roger Casement and the Congo', *The Journal of African History*, Vol.5, No.1 (1964), p.100.

¹³⁾ Hochschild, *op. cit.*, pp.159-60.

膚の上で乾燥させてゴム状にしなければならなかったが、これは肉体的苦痛を伴うものだった。そのため「原住民たちはゴム作りを嫌がるので、無理にでもさせる必要があった」¹⁴⁾のだが、その方法はいわゆるノルマ制度だった。認可会社が管理していた地域では会社ごとに雇っていた民兵組織が、国王の直轄地ではレオポルドの私設軍「公安軍 (Force Publique)」が配備され、村ごとに決められていたゴムの収穫目標が守られているか現地の住民を厳しく監視した。「公安軍」の上官はベルギー軍出身かその他の国出身の白人将校で、その下で働く兵士はアフリカの他の地域から雇われた黒人たちであった。

収穫のノルマが達成できない場合、現地の住民には様々な罰が与えられた。たとえば人質手法は統治の方法として非公式に採用されていたのだが、男性労働者は妻や子供などを人質として軍の施設に監禁され、収穫量が目標に達するまで人質は戻されなかった。監禁中に人質が飢えや病などで死亡することも多く、ノルマが達成できなければ人質は殺害された。またノルマが達成できない労働者は罰として手首や足首から先を切断されたり、耳や鼻を切り落とされたり、射殺されることも多かった。ゴムの収穫量が目標に達しない、あるいは収穫に協力しない集落があれば、その場所の住民すべてを殺害したり集落ごと焼き討ちにすることもあった。黒人兵士たちは銃弾を私的に猟などに使用していないことを証明するよう求められており、使用した銃弾の数と殺害した人数が一致していることを示すため、遺体の右手を切り落とし、証拠として上官に渡す必要もあった。他にむち打ちや身体の拘束なども日常的に起きていた¹⁵⁾。1890年代になるとこのような惨状が西洋社会に伝わり始めた。主に宣教師たちからの報告として伝えられ、一部は新聞に掲載されたりもしたが、状況を変えるほどの影響力はなかった。一例を挙げるとニューヨーク・タイムズの1900年1月5日付の紙面には、アフリカ系アメリカ人の宣教師ウィリアム・H・シェパード (William Henry Sheppard, 1865-1927) の報告として「14の村が焼き払われ、80か90の村人が軍の兵士によって殺害され、手足や頭が切断されて」いたことや「後で上官に提出するため81の切断された右手が火で乾かされていた」ことなどを伝えている¹⁶⁾。

イギリスでもコンゴ自由国の統治について批判が高まっていた。ケースメントと同じくエルダー・デンプスターの従業員だったE. D. モレル (E. D. Morel, 1873-1924) は自分の会社の船荷を見ているうちにコンゴの状況に疑念を抱き始めた。ベルギーからコンゴへの船荷は銃や鎖、爆薬などばかりであるのに対し、コンゴからの船荷はゴムや象牙など高価なものばかりであるのを見て、明らかに搾取が行われると確信した。1901年には会社を退職してジャーナリストとなり、自ら雑誌を発行するなどしてコンゴの状況を

¹⁴⁾ Louis Chaltin (a soldier of Force Publique), *Journal*, July 16, 1892, quoted in *Ibid.*, p.161.

¹⁵⁾ *Ibid.*, pp.160-5 他。

¹⁶⁾ *The New York Times*, January 5, 1900.

改善するよう強く訴えていた。ケースメントとモレルは後に知り合い無二の友人となる。また作家のジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924) はアフリカのコンゴ川流域に住んだことがあり、1890年にはケースメントと知り合っているが、この時の経験を基に小説『闇の奥』 (*Heart of Darkness*, 1898年発表) を残している。ベルリン会議で議決された条約にはコンゴ自由国について他国の介入を可能にする条項がなかったため、イギリス政府には手の打ちようがなかった。1903年5月になってようやく議会下院で「コンゴでの悪行を止めるため」政府に行動を求める動議が可決され¹⁷⁾、これを受けて外務省はコンゴ自由国の領事だったケースメントにゴムの採集が行われている地域への調査を命じた。ケースメントは1903年の6月から約3か月間にわたって調査を行い、12月1日にはイングランドに戻ってこの月の半ばまでに調査報告書を完成させている。しかしベルギーのアントワープとコンゴ自由国の間の貿易をほぼ独占していたエルダー・デンプスター社がレオポルドの意をくんで外務省に2度抗議に来るなどして報告書の公表が遅れ、翌年まで延期された。また報告書にケースメントがすべて実名で記入していた残虐行為を働いた人物や証人の氏名が、公表されたものではイニシャルに代えられるなどしており、状況の深刻さが伝わりにくい内容になっていた。この状況にケースメントは憤慨し、外務省に抗議の手紙を送って退職も辞さないことを伝えている¹⁸⁾。これより前の1900年コンゴ自由国にイギリス領事館を設置するためアフリカへ向かう途中ブリュッセルに立ち寄ったケースメントは、レオポルド国王に2度宮殿に招かれて食事を共にしていた。国王は自分の領地に入る者には目を光らせていたのだ。レオポルドはコンゴの「文明化」についてケースメントに話し続け、「もし何か不都合な情報があったら自分にまず最初に伝えるよう」「いつでも個人的に手紙を書き、率直に書き、非公式に助言してくれるよう」言ったという¹⁹⁾。しかしこの時までにはすでにアフリカでの経験が長かったケースメントは国王に良い印象を持たなかった²⁰⁾。国王はコンゴでのケースメントの動きを常に監視させ、これに気付いていたケースメントは友人への手紙や外務省への伝達で何度もこのことに触れている²¹⁾。

イギリス領事のケースメントの報告書には小説や雑誌の記事では持ちえなかった重みと権威があり²²⁾、レオポルドの統治の実態を詳細に白日の下にさらしたこの報告書は「コンゴの名前を悪名高いものにした」²³⁾。1903年7月に現地の住民から聞き取った話では、「10人の女性、6人の成人男性、8人の少年」が元々いた集落から逃れて別の場所で国内避難民のような状況で暮らしていることを知り、その原因を尋ねている。すると皆異口

¹⁷⁾ *Parliamentary Debates*, 4th series, 122, 2 May, 1903, c. 1298.

¹⁸⁾ Hochschild, *op. cit.*, pp.203-4; Hawkins, *op. cit.*, p.67.

¹⁹⁾ Louis, *op. cit.*, p.103.

²⁰⁾ Hochschild, *op. cit.*, p.198.

²¹⁾ Louis, *op. cit.*, p.104.

²²⁾ Lewis, *op. cit.*, p.365; Hochschild, *op. cit.*, p.203.

²³⁾ Fintan O'Toole, 'The Multiple Hero', *New Republic*, (23 August, 2012).

同音に「政府によって課されたゴム税のせいだ」と答え、「月に4回大量のゴムを納めなければならなかった」と証言している。ケースメントが「それに対していくら支払われたか」と聞くと全員が「支払いなどない！何ももらっていない！」と答え、そのうちの一人がさらに詳細を語っている。

ゴムをバスケット20杯分集めるのには10日かかるので、我々はいつも森の中にいて、支払いが遅れると殺された。ゴムのツタを探すためにどんどん森深くまで入らなければなかったが食べ物はなく、女性は庭や畑を耕すのをやめてしまっていたので人々は餓死した。森の中で働いていると野生の動物—ヒョウ—to何人かは殺されたし、他の者は道に迷ったり日に当たりすぎたり飢えのせいで死んだ。もうゴムがないので解放してくれと白人に頼んだが、白人とその兵士たちは「行け！お前たちは動物と変わらない。お前たちはただの肉の塊だ」と言うのだ。我々はますます森の奥まで入って努力したが、採れたゴムの量が足りないと兵士たちは我々の町に殺しに来た。我々のうちの多くが撃たれた。耳を切りとられた者がいたし、首や体を縄で縛られて連れていかれた者もいた²⁴⁾。

ケースメントはイングランドに戻っている間、彼の帰国を心待ちにしていたモレルと初めて会う。帰国後1週間のケースメントに会ったモレルはケースメントを「ずば抜けてハンサムで印象に残る顔立ちだ」と評し、「握手してお互いの目が合った瞬間、互いの間に信頼と自信が生まれた。そして孤独感が私からさっと消えた。この男は寄り辺ない人々に対して行われた犯罪の残虐さを重要な地位にある人々に信じさせることができる」と書き残している²⁵⁾。その数週間後にはケースメントがモレルの自宅を訪ね、モレルにコンゴの状況を改善するための団体を作るべきだと説得し、その結果誕生したのがコンゴ改善協会 (the Congo Relief Association) である²⁶⁾。外務省勤務のケースメントは表立って活動できないため、モレルが代表となって1904年3月に結成されたが、アメリカにも支局が作られるなどして「イギリスの人道支援活動の歴史上最も広範で最も情熱的な活動」となった²⁷⁾。コンゴ問題は時の知識人の一大関心事となり、アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859-1930) やマーク・トゥエイン (Mark Twain, 1835-1910) なども支援していた。この団体の活動などもあって1905年にはコンゴ自由国の統治に関して調査委員会が結成され、現地の住民を含めて370もの証言が採られた。この年の秋に報告書が発表されるとその内容はケースメントの調査の内容の正確さを証

²⁴⁾ 'Report of the British Consul, Roger Casement, on the Administration of the Congo Free State', *British Parliamentary Papers*, 1904, LXII, Cd. 1933.

²⁵⁾ Quoted in Hochschild, *op. cit.*, p.205.

²⁶⁾ *Ibid.*, pp.204-7.

²⁷⁾ Lewis, *op. cit.*, p.365.

明するものとなった。この後ベルギー政府が国王からコンゴ自由国を買い取る形でベルギーに併合することとなり、1908年に自由国はベルギー領コンゴとなってレオポルドの統治時代は終了する²⁸⁾。ケースメントが報告書にもたびたび記入していたように、コンゴ地域ではゴム採集のための過酷な労働などにより大幅な人口の減少が確認されており、レオポルドが統治していた間にこの地域の人口は1880年と比べて推定で約半分に減少したと考えられている。一方レオポルドはコンゴ自由国の統治で多額の利益を上げていた。王は1909年に死去するが、その資産の整理にベルギー政府は10年以上も費やした。資産が巧妙に隠されるなどしていたためはっきりとした額は今でも不明だが、国王がコンゴから得た利益は現在の貨幣価値で1億アメリカドル程度になるのではないかと推定されている²⁹⁾。ケースメントはこの報告書が評価されて1905年に聖マイケル聖ジョージ勲章 (Order of St. Michael and St. George) を与えられ、コンゴ改善協会はその使命を終えたとして1912年に活動を終えた。この勲章の入った箱をケースメントは生涯開くことがなかったと伝えられる。蜂起に加担して逮捕され勲章の返還を求められた際、「多くの役人が人を殺してでも欲しがらるだろう」この勲章をどこに置いてあるのか覚えてさえおらず、刑務所長に「アイルランドに置いてあるかもしれないので姉妹に探させる」と話し、後日見つかった勲章はいとこがダブリン市内の美術館に寄贈して、結局イギリスに返還されることはなかった。現在はアイルランド国立図書館に保管されている³⁰⁾。

(2) 南米

勲章を受けた翌年の1906年にケースメントはブラジル勤務となり最初にサンパウロの、翌年にはパラの領事となり1908年にはリオデジャネイロの総領事に任命される。ここでもまたケースメントは天然ゴムの採集についての調査を外務省から命じられることとなる。当時ペルー領だったアマゾン川流域で天然ゴム採集のため先住民族が過酷な労働を科されているとの報告がこの頃にはイギリスにも伝わるようになっていた。1909年ロンドンで発行されていた雑誌*Truth*がゴム輸出会社ペルー・アマゾン・ゴム会社 (Peruvian Amazon Rubber Company) による先住民族の扱いの残酷さを繰り返し伝え、市民の間で調査を求める声上がるようになった。なかでもこの年に掲載されたアメリカ人技術者ウォルター・ハーデンバーグ (Walter Hardenburg, 1886-1942) の記事は衝撃を与えた³¹⁾。この会社の創設者はペルー人フリオ・セザール・アラナ (Julio Cesar Arana, 1864-1952) だったが、会社の登記はロンドンにあって役員にはイギリス人もおり、また株主の多くもイギリス人だった。さらにイギリス統治下のバルバドスの

²⁸⁾ Hochschild, *op. cit.*, pp.250-9.

²⁹⁾ *Ibid.*, pp.275-7.

³⁰⁾ Dudgeon, *op. cit.*, p.169, p.304.

³¹⁾ Walter Hardenburg, *The Putumayo, The Devil's Paradise*, (London, T. Fisher Unwin, 1912), also available at <http://www.gutenberg.org/ebooks/45204>.

国民がこの会社に多く雇われており、これらの理由からイギリス政府は調査の必要があると判断した³²⁾。バルバドス人は会社に借金を返済する契約で雇用されており事実上の奴隷契約だった。彼らは先住民を虐待する側になる時があれば、雇用者に虐待されることもあった³³⁾。外務省はケースメントをこの調査の担当者とし、ケースメントは1910年と翌年の2回アマゾン川の支流プトゥマヨ川 (the Putumayo) 流域 (当時ペルー、コロンビアとの国境地帯)の天然ゴム採集が行われている地域で聞き取り調査を行っている。その内容が1912年に公表され先住民たちが置かれている惨状が伝えられた。この報告者では加害者の実名が挙げられており、そのうちの何人かは後にペルー政府によって逮捕されたが、多くは国外に逃亡した。ケースメントはアラナ側から監視され、証人は証言を変えるよう度々妨害を受けた。

ケースメントは外務省への報告に「文明化」した侵略者たち、つまり白人にとって「吹き矢や槍しか持っていない」先住民族は「簡単な獲物」だったに違いなく、これら「文明化した侵略者たちの目的」は先住民族を「根絶やし」にするのではなく「征服すること」すなわち「利益の上がる所有物」にすることだったと記したうえで、侵略者たちが「集団を形成して『商業的集団』などと称し、インディアンたちの抵抗を抑え込んだ後、彼らが住んでいた地域のゴムの木で独占的に働かせた。こうして彼ら先住民族はその集団の長にとって『俺のインディアンたち』つまり白人の所有物となるので、「文明化された隣人の一人が彼のインディアンを盗んだりそそのかしたりするのは重罪」とみなされると説明している。そして「原始的な残虐さを終わらせることを使命としてやってきた白人が、同朋の白人を襲撃」している状況を「インディアン同士の諍いでは経験したことのない程の血生臭さ」と表現している。また先住民族の「90パーセント」が何らかの傷を負っていると報告し、数多くの殺害、虐待、拷問などの例を挙げている。この場所でもコンゴ自由国と同様に先住民族の大幅な人口減少が見られると報告し「外部からもたらされた病による死亡も多かったかもしれないが、ゴムの採集のためにもたらされた暴力と困苦の結果としての死のほうはずっと多かっただろう」としている³⁴⁾。

ケースメントの報告書が公表されるとペルー・アマゾン・ゴム会社の業績は急速に悪化し、1年とたたずに事業を停止した。その結果ゴム取引による利益を狙ってこの地域に移住してきていた人々も次々と去って行った。社長のアラナが罪を問われることはなかったが「コンゴではほぼ12年かかった悪の追放に、プトゥマヨでは3年かからな

³²⁾ Giovanni Costigan, 'The Treason of Sir Roger Casement', *The American Historical Review*, Vol. 60, No. 2, (January, 1955), p.291; Dudgeon, *op. cit.*, pp.208-9.

³³⁾ Michael Taussig, 'Culture of Terror-Space of Death: Roger Casement's Putumayo Report and the Explanation of Torture' in Alexander Laban Hinton ed., *Genocide: An Anthropological Reader*, (Oxford, Blackwell, 2002), p.170.

³⁴⁾ Roger Casement, 'Correspondence respecting the Treatment of British Colonial Subjects and Native Indians employed in the Collection of Rubber in the Putumayo District', *House of Commons Sessional Papers*, (14 February 1912 to 7 March 1913), Vol. 68, also available at <http://www.gutenberg.org/ebooks/45204>.

かった。これは主に一人の男の努力によって成し遂げられた」³⁵⁾と言え、ケースメントは1911年イギリス王室からナイト (knight) の称号を与えられた。しかしケースメントはこの件について「アイルランド人として罪悪感があり、多くのアイルランドの友人たちは私を裏切り者と思うのではと心配している」³⁶⁾と独立運動の仲間への手紙に書いている。この爵位は処刑直前に剥奪された。

(3) アイルランド

ケースメントは1913年に外務省を退職する。退職時にはアフリカや南米でかかったマラリアや皮膚病をはじめ様々な病のために常に体調が優れず、この前年にアイルランドに戻っていたケースメントは友人のモレルに「2階に上がることもできない。ひどく年を取ったと感じるし、体が弱くなってしまった」と伝えている³⁷⁾。これ以降処刑されるまでの3年間はアイルランドの独立運動に献身することとなる。この点についてイギリス政府と外務省のために長年働いて顕著な結果を残し、勲章までもらった人物がなぜ「急に」変わったのかという疑問が呈されることがある³⁸⁾。ケースメントの死の直後は特にこのような論評をされるが多かった。しかし次第にケースメントの残した膨大な手紙や日記などが公開され、彼がアイルランドの独立を目指すようになったのは決して急な変身ではなく、それが「むしろ彼の人生すべてを突き動かしていたもの」³⁹⁾だったことが明らかになってきた。領事としての仕事とアイルランド人としての愛国心には「矛盾がなく」、先住民たちの苦難は「筆舌に尽くしがたい程」だが「かつて自分の国に日々起きていた辛苦を知っているアイルランド人なら理解できるもの」だと述べている⁴⁰⁾。ブラジルに赴任する頃には既に「大英帝国について、特にイギリスによるアイルランドの搾取について不信心」⁴¹⁾を持っており、「アイルランドが第一」と語っている⁴²⁾。アイルランドに帰国していた間この国の本来の言語であったゲール語 (アイルランド語) を学習し、この言語の復興を目標に掲げていたゲール同盟 (the Gaelic League, 1893-) に多額の寄付もしている。ブラジル着任後友人へ宛てた手紙では「あの寂しいコンゴの森の中でレオポルドの真実に気付いた時、自分自身が間違いようもなくアイルランド人であることにも気付いたのだ」とも記している⁴³⁾。この年にはさらに「その権力のほんの100分の1にしかならない島国が自分自身で自国を統治することを大英帝国は許さないと

³⁵⁾ Costigan, *op. cit.*, p.292.

³⁶⁾ Letter to Alice Stopford Green, quoted in *Ibid.*, p.291.

³⁷⁾ October 8, 1912, quoted in *Ibid.*, p.292.

³⁸⁾ The Earl of Birkenhead, *Famous Trials of History*, (London, Hutchinson, 1926), pp.249-55 他.

³⁹⁾ Costigan, *op. cit.*, p.285.

⁴⁰⁾ Quoted in Terence Ranger, 'Roger Casement and Africa', *Transition*, No.26, (1966), p.24.

⁴¹⁾ Kevin Grant, 'Bones of Contention: The Repatriation of the Remains of Roger Casement', *Journal of British Studies*, Vol. 41, No. 3, (July, 2002), p.332.

⁴²⁾ Letter to his cousin, October 9, 1906, quoted in Costigan, *op. cit.*, p.293.

⁴³⁾ Letter to Alice Stopford Green, April 20, 1906, quoted in *Ibid.*, p.293.

言うのなら、そんな帝国は偽物だ。完全に崩壊する運命にある」⁴⁴⁾と予言めいた言葉も残している。またブラジルに勤務している期間中、外務省から注意を受けたにもかかわらず公式の書簡に「イギリスとアイルランド総領事館」と印刷された用紙を使用し続け、アイルランドで製造された紙製品が使用されるよう注意を払っていた⁴⁵⁾。この当時モデルに宛てた手紙では以下のように記している。

私の愛しき祖国の悲劇はコンゴのレオポルド主義よりもずっと深刻でずっと悲惨なのだ。コンゴは生き返って繁栄するだろう。何百万人もの黒人があの荒らされず汚されてない土地に戻ってくるだろう。しかし傷付けられてしまったアイルランド民族を、死んでしまったアイルランド語を、殺されてしまったアイルランド音楽を、誰が生き返らせるのか？⁴⁶⁾

1911年8月、プトゥマヨ川流域への最後の調査に出かける際には「他の人々のために努力するのはこれが最後だ。これからはアイルランドだけに集中するべきで、コンゴもヒンドゥーもインカにも邪魔はさせない」⁴⁷⁾と語り、事実南米から帰国後はアイルランド問題に専念することとなった。「アフリカや南米での白人による支配はイギリスによるアイルランド支配と同等のもの」との考えが深まりつつあったケースメントはこの頃に反英的な文章を発表し始めている。1913年にはアイルランド人を「白いインディアン」と表現し⁴⁸⁾、翌年第一次世界大戦が始まるとイギリスへの戦争協力に反対する立場から「アイルランドは自国のため以外に他のどんな国や大義のためにも血を流す必要はない。アイルランドはイギリス政府による意図的で長期間にわたる悪行によって他のどんな地域よりも苦しんできたのだから」とアイルランドの国内紙に寄稿している⁴⁹⁾。

1880年代以降イギリス議会で3度審議されたアイルランド自治法案 (the Home Rule Bills) に反対する北部アルスター地方のプロテスタント教徒は1911年頃から武装化を始め、1913年1月には民兵組織アルスター義勇軍 (the Ulster Volunteer Force) を結成する。約9万人で組織され元イギリス軍人が多く所属していた。1914年4月には武器の密輸に成功し勢力を拡大していた。この動きに対抗し、アイルランドの自治または独立を目指して結成された民兵組織がアイルランド義勇軍 (the Irish Volunteers) である。1913年11月にダブリンで結成され会員数は最大で16万人に上った。第一次世界大戦への協力をめぐって賛否が分かれて分裂したためイースター蜂起の時点では1万5千人程度に減っていたが、この組織の結成と資金や人員の調達のためにケースメントは奔走する。イース

⁴⁴⁾ Letter to Alfred Emmott, November 12, 1906, quoted in Grant, *op. cit.*, p.333.

⁴⁵⁾ Costigan, *op. cit.*, p.294.

⁴⁶⁾ Letter to E. D. Morel, May 15, 1908, quoted in *Ibid.*, p.295.

⁴⁷⁾ August 4, 1911, quoted in *Ibid.*, p.294.

⁴⁸⁾ Quoted in Lewis, *op. cit.*, p.366.

⁴⁹⁾ *Irish Independent*, October 5, 1914.

ター蜂起の準備と実行に中心的な役割を果たしたのはこの組織であった。なおアイルランド国内での宗派対立は16世紀にまでさかのぼるものの、この1910年代の北部の武装化が1922年の南北分轄を経て以降、特に近年の北アイルランド紛争に見られるような激しい武装闘争を引き起こす要因となった。

ケースメントはアイルランド問題について自治では物足りないと考えていたが、そのことは「イギリス外務省でもイングランドでもアイルランドでもよく知られていて、隠そうとしたことは一度もない」と本人が認めている通り、1913年末には義勇軍の最初の集会で演説に立っている⁵⁰⁾。義勇軍のため「1914年初めにケースメントは自らの発案でロンドンへ行き友人たちから1500ポンドを集め」、その資金で義勇軍はベルギーのアントワープで「1500のライフルと4万5千の弾薬を購入」した⁵¹⁾。これらは1914年7月26日にダブリンの港に密輸されるが、この密輸の計画にもケースメントは深く関与していた⁵²⁾。

1914年7月から10月までアメリカに滞在したケースメントはそこでアイルランド人で構成された秘密組織と合流し、独立を果たすためには世界大戦でイギリスの敵国であるドイツの協力が必要だとの合意に至る⁵³⁾。アイルランドは小国であるが故に、イギリスとの戦いの際には他の大国による武器や人員の援助が必要だとする考え方は新しいものではなく、1798年の大規模な反乱の時にはフランスに支援を依頼した例がある。ケースメントは在米ドイツ大使と面会后、アイルランド「国家」の「特使」として1914年の10月にはドイツに入国し、1916年4月にドイツのUボートでアイルランドに密入国して逮捕されるまでの期間をドイツで過ごす。ドイツでのケースメントの目的は、イギリス軍に所属して大戦に参戦した後ドイツ国内で捕虜となっているアイルランド人を組織して部隊を結成し、来たる蜂起に向けて準備させること、ドイツにアイルランドの独立への支援を表明させること、そして武器を調達することだった。第一次大戦時イギリスの徴兵制度はアイルランドには適用されておらず、またイギリスの戦争に協力する行為には独立運動を支持する人々からの批判も多かったが、収入を得る手段としてイギリス軍に入隊するアイルランド人も多かった。

1914年の末ケースメントはドイツとの間で「協定」を締結し計画は順調に進むかと思われたが、すべての目的が果たされることはなかった。アイルランド兵が捕虜となっているドイツ国内の収容所を度々訪ねたケースメントだったが、捕虜たちは協力的ではな

⁵⁰⁾ Roger Casement, 'Why I Went to Germany', written on December 16, 1915, published on August 10, 1916 on *The Evening Mail* (New York), in Angus Mitchell, ed., *One Bold Deed of Open Treason, The Berlin Diary of Roger Casement*, (Kildare, Merrion Press, 2016), p.235-6.

⁵¹⁾ Bulmer Hobson, 'Foundation and Growth of the Irish Volunteers, 1913-14', in F. X. Martin, ed., *The Irish Volunteers 1913-1915: Recollections & Documents*, (Kildare, Merrion, 2013, first published in 1963), pp.45-6.

⁵²⁾ Darrell Figgis, 'Recollection of the Irish War (1927)', in F. X. Martin, ed., *The Howth Gun-Running: Recollections & Documents*, (Kildare, Merrion Press, 2014, first published in 1964), pp.29-30.

⁵³⁾ F. S. L. Lyons, 'The revolutions in train, 1914-16' in W. E. Vaughan, ed., *A New History of Ireland: Volume VI: Ireland under the Union II, 1870-1921*, (Oxford, Clarendon, 2005, first published in 1996), p.200.

くイギリス軍への忠誠心を持つ者も多かった⁵⁴⁾。ある収容所を訪ねた際300人程いたアイルランド人捕虜のみすぼらしさを見て嘆き、そのうちの一人は「イギリス人よりイギリス人らしく、『イギリスに帰る』とか、『帰ったらドイツ人に仕返しする』などと話していた」と日記に書き残している。またこの捕虜たちに「義勇軍に参加するために武器と兵士をアイルランドに送ろうとしている」と話したものの、「見込みのなさそうな集団で、文字通りアイルランドのクズだ。でも見方を変えれば我々の参戦反対活動が打撃を与えたことをはっきり示している」と捕虜たちが自分と目的を共にできるような集団ではないことを早い時点で理解していた⁵⁵⁾。そして1915年初めには早くも「アイルランド人部隊の結成はあきらめた」ので「ドイツに残る目的はほとんどなくドイツ政府も私にいてほしくないに違いない・・・彼らはアイルランド問題にほとんど関心がない」⁵⁶⁾と記している。「1915年の晩冬から春にはドイツ政府に全くアイルランドについての政策がないとわかっていた」のだが、ケースメントの動きは外務省を退職後もイギリス情報当局に監視されており、またアメリカからヨーロッパに戻ってきたケースメントの身柄には懸賞金も懸けられていたため、ドイツ入国後は「事実上捕らわれの身」になり身動きがとれなくなっていた⁵⁷⁾。そしてこの時点で「ダブリンの市街地で反乱を起こすことは愚かどころではない。犯罪的にばかっている」と考え1915年4月、後にイースター蜂起の首謀者として処刑されるうちの一人がドイツを訪ねてきた際には「このばかげた行為を君がやると言うなら私も帰国して君に加わって、一緒に戦い死のう・・・私は強く反対するが君たちがやるのなら、名誉にかけて私は一緒に戦うことを拒否できない。それがどんなに無駄で無益なものであっても」⁵⁸⁾と蜂起が成功しないことを予見していた。ドイツに2千から3千人いたと推定されている捕虜のうち義勇軍に参加したのは50から55人だけで、ドイツ軍から渡された武器も期待をはるかに下回る「軍隊の活動とは言えない」⁵⁹⁾程度のものであったことを考えればこう予見したのも当然のことだっただろう。アイルランドへ密入国する寸前には「すべてがひどすぎる・・・名誉以外すべて失われた・・・私は早く死んだ方がよいのだろう」⁶⁰⁾と絶望的な状況に陥っていた。

1916年4月21日の聖金曜日、イースター蜂起がダブリンで始まる3日前にケースメントはドイツの潜水艦でアイルランド西部の港から武器とともに密入国したが、やはりイギリス当局に監視されていたためすぐに逮捕され、その後ロンドンに身柄を送られて公開裁判を受けることとなる。この年の7月には大逆罪で死刑が確定するのだが、この裁判

⁵⁴⁾ David Fitzpatrick, 'Militarism in Ireland, 1900-1922' in Thomas Bartlett and Keith Jeffery, eds., *A Military History of Ireland*, (Cambridge, Cambridge University Press, 1997, first published in 1996), p.394.

⁵⁵⁾ Diary on December 2, 1914 at Limburg, in Mitchell, ed., *One Bold Deed*, pp.91-2.

⁵⁶⁾ Diary on January 15, 1915 at Limburg, in *Ibid.*, p.142.

⁵⁷⁾ Diary on March 28, 1916 at Berlin, in *Ibid.*, p.167.

⁵⁸⁾ *Ibid.*, p.167-8.

⁵⁹⁾ Diary on April 5, 1916 at Berlin, in *Ibid.*, p.211.

⁶⁰⁾ *Ibid.*, p.218.

は14世紀のノルマン時代の法律を適用してケースメントを有罪にしなければならない程、法的根拠に乏しいものだった⁶¹⁾。イギリスの法律史上、反逆罪の解釈において最も重要な判例⁶²⁾ともされるこの裁判だが、その過程で「黒い日記 (the Black Diaries)」と後に呼ばれるようになるケースメントが書いたとされる日記が登場して、判決の妥当性が精査されないまま、ケースメントの私生活に注目が集まることとなった。同性愛行為の詳細が多く記述されたこの日記の存在により、これ以降ケースメントをめぐる議論はこの日記に集中することになり、彼の他の側面が軽視される結果となってしまった。

1916年7月18日に控訴審が結審し大逆罪で有罪が確定したが、イギリスではケースメントの功績を考慮して減刑を求める署名がアーサー・コナン・ドイルなどの著名人によって提出され、1351年に制定された法を適用することへの疑問も高まっていた。またイギリス政府はアメリカの大戦への参戦を望んでいた時期だったため、既にイースター蜂起直後に15人が処刑されたことで深刻な打撃を与えてしまったアメリカの世論への影響も憂慮していた。実際アメリカの黒人向け雑誌には「コンゴでの残虐行為を勇敢にも暴露した最初のイギリスの役人であるケースメント氏には黒人として永遠の感謝を捧げるべき」なので「我々の人種を擁護してくれたことに報いるため、数百万人の黒人で（なかには今ベルギーのためにヨーロッパ戦線で戦っている人もいる）イギリス大使に恩赦を願う請願をすべきではないか」との投書も掲載されている⁶³⁾。そこでイギリス内務省は結審の翌日には「ケースメントが殉教者になることを防ぐために慎重な方法で日記を利用するのが賢明だ⁶⁴⁾」と内閣に意見し、もしケースメントが「処刑されても彼の不道徳な実態がアイルランドで広まれば、彼への同情は減って殉教者として扱われるのを防ぐだろう⁶⁵⁾」とも伝達している。こうして「黒い日記」を写したとされる写真や記述の詳細などがアメリカの支援者や新聞記者の他、政治家や聖職者、さらにはイギリス国王やアメリカ大統領にも伝えられたとされ、これが影響したのかアメリカ上院で可決されていたケースメントの減刑を求める動議に大統領は賛同しなかった⁶⁶⁾。ケースメントの弁護団にもこの日記が提供された。これを法廷に提出してケースメントが「精神異常者⁶⁷⁾」であるとして極刑を避けることも可能だったが、「被告人の評判を損ないアイルランド

⁶¹⁾ Dorothy MacArdle, *The Irish Republic: A Documented Chronicle of the Anglo-Irish Conflict and the Partitioning of Ireland, with a Detailed Account of the Period 1916-1923* (London, Victor Gollancz, 1937), p.205; Helen Andrews, 'Roger Casement: The Gay Irish Humanitarian who was Hanged on a Comma', *The First Things*, (November 2011); Niamh Howlin, 'Was Roger Casement's trial a legal travesty?', *Irish Independent*, February 18, 2016.

⁶²⁾ Angus Mitchell, 'Roger Casement: imperialist, rebel, revolutionary', *History Ireland*, Vol. 16, No. 4, (July-August, 2008).

⁶³⁾ *The Crisis*, Vol.12, No.4, (August, 1916).

⁶⁴⁾ Quoted in Colm Tóibín, 'A Whale of a Time', *London Review of Books*, Vol. 19 No. 19, (October 2, 1997), pp. 24-7.

⁶⁵⁾ Quoted in Dudgeon, *op. cit.*, p.529.

⁶⁶⁾ O'Toole, *op. cit.*; Lewis, *op. cit.*, p.367.

⁶⁷⁾ 当時同性愛は一般的に疾患と考えられており、1948年に設立された世界保健機構 (WHO) は1990年まで同性愛を疾患の一つと規定していた。

の独立運動という大義に傷を付ける」ことを懸念し、また「公に同性愛者として知られるよりも死のほうが良い」と考え弁護団は日記を証拠として採用しなかった⁶⁸⁾。このような経緯でケースメントの支援活動が急速に弱まるなか、8月3日ロンドンの刑務所で処刑が実行された。

(3) その後

この「黒い日記」のために「ケースメントの評判と遺産は深刻な痛手を負った」⁶⁹⁾。これがイギリス政府の狙いだったとすれば大いに成功したと言える。1世紀以上を経た今でもケースメントは同性愛者としてのイメージばかりが強く、多面的に捉えられることが少ないからだ。しかしこの日記をめぐる論争が絶えず、イギリス情報当局による捏造だと考える研究者が多いのも事実だ。その入手経路などを含めて不明な点が多く、何度か行われた鑑定も決定的な結論には至っていない。2002年に行われた鑑定は日記の筆跡をケースメントのものと結論を出したが、これには批判が噴出し当初予定されていた鑑定結果の一般向けの出版が見送られる事態となった⁷⁰⁾。また仮にこれがケースメントの筆跡だったとしても、記述がすべて実際の出来事であったと断定することは今となっては不可能である。ペルー出身の作家マリオ・バルガス・リョサ (Mario Vargas Llosa, 1936-) のようにこの日記の記述をケースメントの想像や願望だと解釈して作品を発表している例もある。この日記以外にケースメントのセクシュアリティを示す史料はほぼ存在せず、アイルランドを含むイギリス全土では当時同性愛行為が逮捕の可能性のある犯罪であったにもかかわらず、常に監視下にあったケースメントがなぜこのような日記を残す必要があったのかなど、様々な疑問が今日でも議論されている。

しかし我々はケースメントのセクシュアリティの真偽よりも、むしろそれが「武器」として使われたことに注目すべきだろう⁷¹⁾。裁判の駆け引きだけにとどまらず、独立戦争後の和平調停のため1921年に行われたイギリスとアイルランドとの交渉でも、この日記がアイルランド代表団に提示され、言わば戦争の「武器」として使用された。建国の父の一人であるケースメントが同性愛者であることは、南北分轄後のアイルランド自由国、後には共和国にとってその「政治的正当性」を危うくするものだった。したがってケースメントの遺骨が1965年になってアイルランドに返還された時にも、この日記の存在を肯定することを避けたいアイルランド政府の意向もあり「黒い日記」はイギリスに

⁶⁸⁾ Lewis, *op. cit.*, p.365; Mitchell, *16 Lives*, chapter 12, 13.

⁶⁹⁾ Tóibín, *op. cit.*

⁷⁰⁾ James J. Horan, 'The Casement Case', *British Association for Irish Studies*, Newsletter, No. 31, (July, 2002); Marcel B. Matley, 'Black Diaries Attributed to Sir Roger Casement, The Audrey Giles Report' (April 21, 2002); Paul Hyde, 'Casement Tried and Tested - The Giles Report', *History Ireland*, Vol.24, No. 4, (July-August, 2016), pp. 38-41; Paul Hyde, 'Lost to History: An Assessment and Review of the Casement Black Diaries', *Breac: A Digital Journal of Irish Studies*, (April, 2016).

⁷¹⁾ Angus Mitchell, 'The Black Stain', *Gay Community News*, (April 2016), p.21.

とどまることになった⁷²⁾。現在ケースメントの日記や手紙のほとんどがアイルランドで保管されているのに対し、この日記だけは今でもイギリスの公文書館で管理されている。

同性愛者としてのケースメントがどのようにアイルランドで受容されてきたかを検証することも重要だろう。敬虔なカトリック国であることを標榜していたアイルランドでは、処刑直後の時期にはケースメントが同性愛者であることを否定する論調が強く、新聞等では日記は偽造であると主張する記事も多く掲載された⁷³⁾。しかし一方では着実に「ケースメントのセクシュアリティを受け入れて彼の人間としての複雑さを理解しようとする」動きもあった。ケースメントを題材にした作品も残しているアイルランド出身の詩人W. B. イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) は「もしケースメントが同性愛者だったら、それが何だというのだ！」と内々に語り、また1956年になると「愛国心と同性愛は共存できる可能性がある」という意見が初めて公で述べられ「彼が偉大な愛国者だったことは何があっても忘れてはならない。それに彼が同性愛者だったことも！」との意見が新聞に掲載された⁷⁴⁾。そして今日ではケースメントは「ゲイ・アイコン」であり「かつてはそのセクシュアリティにもかかわらず英雄」とみなされたが「今ではそのセクシュアリティ故に一層英雄視される」状況になっている⁷⁵⁾。自らも同性愛者であることを公表しているアイルランド出身の作家コラム・トービン (Colm Tóibín, 1955-) は「彼はゲイの英雄だ。あの日記のせいで私は彼をより尊敬する」と話し、「日記の内容は今日の同性愛者には驚くようなものではない」としている⁷⁶⁾。アイルランドでは2015年に同性婚が法的に認められ、2017年に首相になったレオ・ヴァラッカー (Leo Varadkar, 1979-) は同性愛者であることを公言しているが、それが問題視されるようなことはない。ケースメントの死後1世紀を経てアイルランド社会はこれ程までに成熟したのだから、今後彼についての議論がより深まることを期待する。「彼は性的少数者のために自分の首を差し出したのではなく」⁷⁷⁾アイルランドのために差し出し、裁判では「私を正しく裁くことができるのはアイルランドの人々だけだ」⁷⁸⁾と語っている。それに答える時期が来ているのではないか。

アフリカと南米の先住民族は「野蛮」だから「文明化」する必要があるとされたが、それはイギリスによるアイルランドの植民地化の根拠とされた論理と同じである。「野蛮」であるという「印象」は「支配のための強力な道具」となる⁷⁹⁾。アイルランドでは早くも12世紀にウェールズのジェラルド (Gerald of Wales, c.1146-c.1223) がアイルラ

⁷²⁾ Grant, *op. cit.*, p.131.

⁷³⁾ *Ibid.*, pp.337-41.

⁷⁴⁾ Lewis, *op. cit.*, pp.376-7.

⁷⁵⁾ O'Toole, *op. cit.*

⁷⁶⁾ Quoted in Lewis, *op. cit.*, p.369, p.380.

⁷⁷⁾ *Ibid.*, p.382.

⁷⁸⁾ George H. Knott, ed., *Trial of Sir Roger Casement*, (Edinburgh, W. Hodge, 1917).

⁷⁹⁾ Taussig, *op. cit.*, p.182.

ンド人は「残虐な野蛮人だ」と記して、ノルマン人によるアイルランド侵略を正当化する根拠となった。15、16世紀にはアイルランド人は「奇妙な言葉話す野蛮な人々」でその行動、風習、衣服も「原始的で野蛮」なため「森の中に住む野蛮人」とみなされ、16世紀末になるとイギリスの高官の中には「アイルランド人の野蛮さはスキタイ人として知られる最も残虐な民族の子孫だから」との説を信じる者もあった⁸⁰⁾。「征服」に成功するためには支配する側にこうした「印象」が共有されることは重要で、これがアフリカ、南米、アイルランドに共通した経験であることをケースメントは理解していた⁸¹⁾。またケースメントは「文明化と経済発展の連携という決まり文句」にも懐疑的だった⁸²⁾。アフリカでは「自分の肌の色を恥ずかしく思う。白人であることは強欲で情け容赦のない支配者であることだからだ⁸³⁾」と記し、南米では外務省の上司に「ゴムの製造のために人々が地獄のような苦しみをどれだけ味わったか。誰も知らないし、誰も聞かないし、誰も疑わなかった。ひょっとして誰も気にも留めないのか？」⁸⁴⁾と尋ねているが、これは今日にも通じる問いかけである。ケースメントが見聞きしたのは決して昔の出来事ではなく「人権よりも経済が優先される」⁸⁵⁾今こそ重要な課題だろう。

ケースメントの活動は「20世紀の人権侵害調査の父と言え、今日のヒューマン・ライツ・ウォッチやアムネスティ・インターナショナルの前身を一人でやっていたようなもの」⁸⁶⁾と評され、ケースメントは「人権侵害を告発した先駆者で、1916年に処刑される前には後のネルソン・マンデラやマーティン・ルーサー・キングと同等の世界的名声を得ていた」⁸⁷⁾。まさにケースメントは時代の先を行く人物だったと言えよう。もし彼が今の世に生きていればそのセクシュアリティが問題視されることもなかっただろうことも考えると、やはり「早すぎた男」であった。しかし今の世は彼を「英雄」にはしなかっただろう。大義のために命を賭すというのは時代錯誤であるからだ。先述のヴァルガス・リョサはケースメントが「植民地主義を批判した最初のヨーロッパ人の一人」で「アフリカとアマゾンで繰り返された虐待、不正義、残虐行為に立ち向かった勇気に魅了された。彼は植民地主義の現実を世界に知らしめた」と語っている⁸⁸⁾。しかし我々は今日も起きているだろう虐待や不正義、残虐行為に目を向けているだろうか。ケースメントの「墓

⁸⁰⁾ Steven G. Ellis, *Defending English Ground: War and Peace in Meath and Northumberland, 1460-1542*, (Oxford, Oxford University Press, 2015), pp.52-5.

⁸¹⁾ Séamas Ó Siocháin, 'Roger Casement, Ethnography and the Putumayo', *Eire-Ireland*, Vol.29, No.3, (1995), p.36.

⁸²⁾ *Ibid.*, p.35.

⁸³⁾ Quoted in B. L. Reid, 'A Good Man: Has Had Fever Casement in the Congo', *The Sewanee Review*, Vol.82, No.3, (Summer, 1974), p.477.

⁸⁴⁾ Letter to Sir Edward Grey, January 1911, quoted in Fiona Reilly, 'Roger Casement-voice of the voiceless', *History Ireland*, Vol.25, No.1, (January-February, 2017).

⁸⁵⁾ *Ibid.*

⁸⁶⁾ O'Toole, *op. cit.*

⁸⁷⁾ Hyde, 'Lost to History'.

⁸⁸⁾ Mario Vargas Llosa on Casement, Interview with the BBC, 25 November 2013, <https://www.bbc.com/news/uk-northern-ireland-25017936>.

は静かではない」⁸⁹⁾とよく言われるが、その一因は我々が彼が文字通り身を挺して世界に示した不正義や残虐行為にあまりに鈍感であることだろう。もう一つの要因は彼が生前希望していたアントリムでの埋葬が実現していないことだ。1965年に遺骨が返還された時にはイギリス領北アイルランドとなっていた親英派の住民の多いアントリムに埋葬すればプロテスタント教徒の反発が予想されるとして、共和国内のグラスネヴィン墓地に埋葬する決定がなされた経緯がある。実際ケースメントが通っていた学校の卒業生の一人は地元で「彼は裏切り者とみなされている」と話している⁹⁰⁾。イギリスのEU離脱に伴いアイルランドの南北統一の可能性が語られる機会が多くなっている昨今だが、ケースメントの遺骨が静かにアントリムで眠ることができる日は来るのか。その日まで「ロジャー・ケースメントの魂はドアをノックし続ける」のだろう⁹¹⁾。

(本学非常勤講師)

⁸⁹⁾ Jeffrey Panciera, 'Why Roger Casement Still Haunt Us', *The Gay & Lesbian Review*, (May-June, 2014), p.15.

⁹⁰⁾ Peter Crutchley, 'Roger Casement: How did a hero come to be considered a traitor?' (November 25, 2013), <https://www.bbc.com/news/uk-northern-ireland-25017936>.

⁹¹⁾ W. B. Yeats, 'The Ghost of Roger Casement', in *New Poems* (1938), (The ghost of Roger Casement/Is beating on the door).